

東北アジアにおける「熊民俗」の研究 ——シベリアのバイカル湖地域の現地踏査を中心に——

朴 炫国*¹ 須藤 護*²
宋 孝燮*³ 崔 元午*⁴
梁 珉種*⁵

A study on Bear Folk of East western Asia

Hunkuk PARK*¹, Mamoru SUDO*², Hyosup SONG*³

Wonoh CHOI*⁴, Minjon YANG*⁵

Siberia and the Korean Peninsula is connected by land. In this article, I will introduce the lifestyle, culture, and religion of Siberians who live around Lake Baikal, which I discovered from the fieldwork that was done last year. There is a myth that the people of the Korean peninsula are originally from the cold area of the north. They had come south in search of a warmer climate. In the Silla area, currently called Gyungsangdo, there have been findings of decorations made out of white birch trees. These decorations are very similar to the decorations that are found among the people of Siberia. Through these observations, it can be inferred that there were communications and interactions between the people of the Korean peninsula and the people of Siberia. From fieldwork, I found out many similar aspects of lifestyle, religion, shelter, and cuisine between the cultures of the Korean peninsula and Siberia. Through more research in the future, I wish to confirm the northwestern Asia core of culture.

1. はじめに

シベリアはウラル山脈の東側からオホーツク海に至る広範な地域をいう。現在はロシア国土に編入され多くの地域に区分されている。元来シベリアには多くの遊牧民族が生活していた地域だが現在はロシアの影響によって遊牧民族はほとんど見ることが出来ない。嘗てのモンゴルの地だった地域では今もモンゴルとの交流を行っているのを見ることが出来る。ただ、ロシア史の転変の中で多くのロシア人がシベリアに流入し、現在では少数民族の伝統や生活様式を探すのが困難である。本論考では2011年8月に訪問したシベリアのイルクーツクとウランウデを中心にシベリアの歴史と生活、民族と宗教などに対して考察を試みる。本来シベリアの熊民俗について調べるつもりでしたがあまり残ってなかった。

*1 龍谷大学国際文化学部教授

*2 龍谷大学国際文化学部教授

*3 西江大学校教授

*4 光州教育大学校教授

*5 釜山大学校教授

シベリアのバイカル湖地域の現地踏査日程を紹介すれば次のようになる。

- 8月8日 韓国、ソウル、研究の打ち合わせ
- 8月9日 15:20-19:00 仁川出発、ブラジボストク到着
23:40-01:50 ブラジボストク発のイルクーツク到着
- 8月10日 -ウスチーオルダのブリャト民俗博物館（観覧及びブリャト伝統踊公演感想）經由
アルホン島到着
- 8月11日 -アルホン島内民俗博物館、ブリャトの民俗調査
- 8月12日 -イルクーツク市内へ移動／市内踏査、郷土博物館
夕食後ウルランーウデへ出発（夜行列車）
- 8月13日 -朝07時頃ウルランーウデ到着、シャーマンの村訪問調査
-ウルランーウデ地域ブリャト民俗博物館等探訪
- 8月14日 -イボルギンスキー・ダサン・チベツト仏教寺院、ウルランーウデ国立ブリャト博
物館
夕食後イルクーツクへ出発（夜行列車）
- 8月15日 -06:30分頃イルクーツク到着
-朝食後 歴史博物館／タルチ民俗博物館／バイカル生態博物館／等等
-夕食事後 空港へ移動
- 8月16日 -01:20 イルクーツク出発
-07:30 ブラジボストク到着
-13:00 ブラジボストク出発、-13:20 仁川到着
- 8月17日 研究の打ち合わせ、ソウルー関空へ

2. シベリアの考古学、マルタ遺跡とマルタ出土品

シベリアで最も古い考古学的遺跡はマルタ遺跡から出土したマルタ出土品である。マルタ出土品はマルタ遺跡から近いイルクーツク（Irkutsk）市郷土博物館に保存展示されている。郷土博物館はアンガラ河畔にあるアンガラ公園の横に有る。この公園には帝政ロシアの皇帝アレクサンダー3世の銅像が立っている。1891年、アレクサンダー3世によって初めてシベリア横断鉄道建設が着工され、横断鉄道はその25年後の1916年に完工した。これを記念し、シベリア横断鉄道（9259キロメートル、ロシア号、上りは標準6泊7日、平均時速62キロメートル、2010年10月現在）が通過する諸処に彼の銅像が立っている。調査団一行は最初の日の8月10日、早朝にイルクーツクに到着した。イルクーツクはバイカル湖から流れ出たアンガラ川が渦巻きながら流れる川辺の都市であり、人口は約60万人である。ある時期、流刑地として多くのロシア貴族たちがこの地に流されたが、彼らはモスクワ文化を移入させた。

現在はシベリア中部の教育文化都市として大学が10余学有り、中・高等学校も30余校有している。そして、アンガラ（Angara）川を堰き止め水力発電所を作りこの電氣を利用してアルミニウムなど種々の金属工業を発展させた。調査団が最初にイルクーツクの郷土博物館を訪ねたのは8月12日だった。郷土博物館はアンガラ川の川辺にある二階建ての建物である。一階には考古学的出土品とシベリアに居住していた部族が使用していた歴史的な文化関連出土品が展示されており、二階に

は現代ロシア発展の姿を紹介している。特に、1928年発掘されたマルタ（Malta）遺跡から出た出土品がここに保管・展示されている。

マルタ（Malta）遺跡はシベリアの旧石器遺跡として世界的に有名である。この遺跡はイルクーツクから西方にシベリア鉄道に沿って約1時間半離れたアンガラ川支流のベラヤ（Belaja）川の左側20メートル高地にある。マルタ（Malta）遺跡で発見された出土品で、石で作った道具やマンモスの骨で作られた人の姿が知られている。マルタ（Malta）遺跡はロシアで一番古い遺跡でマンモスの骨で作られた様々な飾りと人骨などが出土した。調査の結果、この遺跡で出土された人骨はモンゴル人種であり、約2万3000年前のシベリア人の生活の一端をうかがい知ることができる貴重な資料だと言う。特にマルタ（Malta）遺跡で出土された人骨のDNAが日本の縄文人のそれと似ている構造をしているという点で縄文人の移入原点を北方に推定出来る貴重な資料となっている。マルタ（Malta）遺跡で発掘された出土品はマンモスの骨で人を彫刻し、男女を共に彫刻しているが手や足がなく身体のみを強調して作られ、女性の下腹部を強調し彫られている。その事によって研究者たちの中ではこの女性の彫刻品が性器崇拝の象徴物ではないかと推定する意見もある。男女の性器が子を生む道具という点で性器を崇拝し、神聖なものとして扱い、より多くの子孫を得ようとする呪術の道具として見ている。

これ以外にも郷郷土博物館にはシャーマンが儀式を行う際、着る服と呪術を行う時に使用するさまざまな道具が展示されており、ロシア・シャーマニズムを研究する貴重な資料を提供してくれている。

3. シベリアの建築、人の生活に使用する器、家、タルチ木造建築博物館

8月15日午後、曇り空の中をリストビヤンカ（Listvjanka）に行く途中にあるタルチ（Taltsy）木造建築博物館を訪ねた。タルチ木造建築博物館はイルクーツクからバイカル湖に向けて46キロメートル程離れたアンガラ（Angara）川の川端にある。18、19世紀シベリアに原住していた人々とロシアから移住して来た人々が住んでいた家屋や生活様式などを一ヶ所に移し集めている。当時のブリヤト人が住んでいた家屋は屋根に天窓が開けられており、床には土が露出している。シベリアに原住していたブリヤト、エベンキ人はもちろんロシア人が移入し住んだ当時の姿も共に復元して置いている。

シベリアは樹木が多い。人々は何でも樹木で作る。家を建てる際、壁から屋根まで全て樹木で作る。木で壁を作る時には木と木の間に乾かした水草を挟み込み、隙間風が入るのを阻む。シベリアに住んでいた人々は樹木で家を建てる時、窓は作らなかった。窓を作るのは構造上水準の高い技術が必要だったからである。現在でもシベリアに住むロシア人やブリヤト人が家を建てる時にはその構造は殆ど変わらない。全ての人々は殆ど同じ方式で同じ形式の家を建てて生活している。

タルチ木造建築博物館下側のアンガラ川端には原住民が使った舟が置かれており井戸を含め砂金を掘った施設が復元されている。タルチ木造建築博物館の後端はアンガラ川と繋がっている。それで、ここには人々が砂金を採取する施設も作った。そして木で作った舟も何隻か係留されていた。

この博物館は広く、一つの村に入ったかのような感じだった。時々、草畑で草を食んでいる馬も見ることが出来た。タルチ木造建築博物館には初めてシベリアに入り生活し始めたロシア人たちが建てた教会がある。諸処で古い建物を補修している状況も見ることが出来た。建物と建物の間の広場

では子供たちがぶらんこに乗っている姿も見られた。ぶらんこは綱が二本ずつ垂れ下がっている。博物館の入口や周りには白樺の森が生い茂っていた。

白樺の皮は油気があり、火によく燃えるが堅いのでさまざまな生活用品を作り、また装飾品を作るのに使用する。白樺の皮を利用して作った装飾品は韓国の慶州天馬塚から出土したことも有る。日本の人は「新羅」をシラギと読むが、白い木すなわち白樺が好きな人という意味とも言うそうだ。(新羅はシラノギ、即ちシラの城)。したがって、白樺は韓半島とシベリアを繋ぐ紐でもある。

4. シベリアの中心・バイカル湖

8月10日から三日間シベリアにあるバイカル湖を踏査した。まず、韓国の仁川（インチョン）から2時間位飛行機でウラジオストックに向かい、再び飛行機を乗換え4時間ほど後にイルクーツクに到着した。イルクーツクからまた五時間かけ290キロメートルを車に揺られバイカル湖の中に有るアルホンソム宿に着いた。アルホンソム島に向かうには10分位舟に乗りなければならなかった。バイカル湖はシベリアの真珠と言われている。真珠のように清く澄んだ湖の水、そしてバイカル湖の周辺に開かれている大自然の姿をそのように表現しているである。バイカル湖は広い海、豊かな海というシベリア原住民の言葉の意味だという。バイカル湖は長さだけでも636キロメートルで、世界で一番大きな湖ではないが一番深く（1680メートル）、最大の淡水湖である。全地球淡水量の20パーセントにあたると言う。ここに棲息している生物体の数は約3500種類が有ると言われている。この湖は2500万年前から火山活動と地殻変動によって作られたと推測されている。

元来、アルホン島にはブリヤト人が生活していたが今はロシア人がより多く居住している。ロシア人が家を建てる時の窓の様子は非常に個性的である。これは、その家に住んでいた人が死んだ後、この窓模様を目当てに尋ねて来なさいという意味だと言う。ある人は、ロシア人は家を建てる時には窓は家の目だと考え、自分の目の色と同じ色を塗ると言う。

バイカル湖は外形的規模が大きいだけではなくシベリアに住む人々の精神的支柱を担って来たといえる。言わばそれはバイカル湖がシャーマンの聖地という事を意味する。シベリア・シャーマンは常にバイカル湖にあるアルホン島のシャーマン岩に尋ねては祈り、そこで神に出会い自分の霊的力を再充電すると言う。シャーマン岩はブルハン岩とも言う。シャーマン岩はバイカル湖のアルホン島の中にあるが、ブリヤト人はここがジンギスカンの陵墓だと言う。シャーマンたちはここに自分が仕える神や多くの神が降る聖なる場だと思っている。

バイカル湖の中央にあるアルホン島は長さ72キロメートル、幅12キロメートルに至る長い島である。島の中東にあるイジマ山（海拔1274メートル）を中心に山脈が繋がっているが、山の周りには小さな湖が五つあって、タイガー、ステップ、砂漠地域が広がっている。湖面の平均海拔は556メートル程度である。湖水は40メートル以上の深さまで裸目で見られるほど清く透明である。

シベリアのブランコは韓国等で一般的に見られるブランコとは違い綱が二本ずつ対になって垂れ下がっている。アルホン島のシャーマン岩の近くにはフジル村がある。村の周辺にはブランコを含めてすべり台等がある。木で作ったすべり台は雪が降って寒くなれば使われる。アルホン島の村の中や周辺には松が多い。アルホン島の中でも海拔高度にしたがって森の生態や木の種類が異なる。バイカル湖に流入する川は全部で336川である。しかし、湖から流れる出る川は1ヶ所、アンガラ川のみである。湖の北から流入した水が下にあるアンガラ川流れ出るには300年位かかり、湖の中

間から流入する水は平均 150 年位かかると言う。バイカル湖は 1 月になると徐々に凍り始めると急速に 1 メートル以上厚く凍ると言う。こんように凍ったバイカル湖の水は 6 月頃、春風が吹けば解け始める。湖の周辺の樹木が新緑に輝く 6 月の湖水はやっと $-2^{\circ}\text{C} \sim 1^{\circ}\text{C}$ になる。7 月になると、いよいよ湖水の温度が 4°C に上がりこの温度が年平均水温になる。8 月になると湖水の温度が 7°C になってこの時「サルマ」と呼ばれる台風が発生し風速 40 メートルの北西風が吹き波も 5 メートル以上になる。この風を現地の人々は「バルクジン」と呼ぶ。「バルクジン」は中年の女の人が再び若返ったというロシアの諺から出た言葉だと言う。この時、湖水は $9^{\circ}\text{C} \sim 12^{\circ}\text{C}$ になる事がある。バイカル湖の水は常に冷たい。それでも湖に裸になって入って行く人が多い。これはバイカル湖の水を神聖な水だと信じているからである。居住民はバイカル湖に身を一度浸かれば 5 年若くなると語る。バイカル湖の氣力が強いので人の魂を清め無病息災でいられるとも語る。9 月になると湖の周辺の樹木は紅葉し始め、冷え込む中で、10 月に入ると急速に落葉し霜が降り始める。11 月に温度が下がり -40°C になっても湖水はまだ凍結しない。1 月に凍結し始めた湖水は 5 月まで自分の姿を見せない。

諸処の著名な所に伝説や神話があるようにこのバイカル湖とアンガラ川にも伝説が伝わる。バイカル湖爺さんは息子 336 人と綺麗な一人娘アングガラを育てていた。バイカル爺さんはアングガラをイルクトという青年に嫁がせようと密かに決めていた。「イルクト」とは、波が荒々しい川という意味だが、イルクーツクという都市名がまさにこの川の名前に由来する。ところが、バイカル湖に住むカモメの群れはアングガラに、「遠く北に住むエニセイという勇士がもっと格好よい」と囁いた。エニセイ川はアンガラ川と合流した後遠く北極海に流れ込む。その時からアンガラはエニセイを愛するようになった。それに気づいたバイカル爺さんは娘を見張り、堪えきれなくなり彼女は父が眠った隙に密かに逃げようとした。バイカル爺さんは眠りから覚めると、驚いて大きい岩を投げつけ岩がアングラの白い首に当たり彼女は死んでしまった。今もアングラはいつもエニセイを慕い涙を流していると言う。これはバイカル湖の周辺の自然現象を擬人化し説明した興味深い伝説である。主にバイカル爺さんの神は風として表され、一人娘アングラは水の神として語られる。

バイカル湖の周辺だけではなくシベリアの多くの所では樹木に青色の布地を縛り幸せと旅の無事を祈願する。こんように木に縛る布地をシャマン・リボンといい、「セルゲ」と呼ぶ。韓国の城隍堂や堂山のように当地に神が降りると信じ、人々は生きている樹木や木の柱に青色の布地を縛り、小銭、お菓子などを投げ無事安全を祈願する。バイカル湖がアンガラ川に流れる南側の地名が「リストビヤンカ」である。ここは観光客が多く周辺には村落があつて居住人口も多い。

5. バイカル湖・アルホン島の民俗博物館、集った人々の真心と魂が秘められている博物館

8 月 11 日午前、快晴の中、バイカル湖の中に有るアルホン島の民俗博物館を見学した。この博物館はアルホン島の小学校の中に有る。この博物館は当初この学校の校長が在職中に島の周りに散在していた生活道具を集めながら始めたと言う。この博物館にはシベリアの他の地域で見られない珍しい貴重な資料が多く展示してあり、興味深く見学出来た。

人々が農業をするためには土地を耕さなければならない。土地を耕すことは人間もできるが動物の力を利用すればより易しくもっと深く耕すことができる。そのようにより良く土地を掘り起こす

ために使った農機具が犁である。人類史において犁はずいぶん昔から使われて来た。シベリア地域で使われた犁はシベリアの広い土地を耕すためなのか頑丈な構造が印象的だった。それで犁先と牛や馬と繋ぐ犁練木が対になっている。そして、当地で使われた犁は牛ではなく力の強い馬が引いた。

シベリアには白樺と五葉松が多い。五葉松に出来る松の實を収穫する器具が印象的だった。その道具は他所では見られないものであった。五葉松があり、五葉松の実を生産する所だけで見られるものだ。そして、収穫した穀物を碎いてパウダーを作る石臼も展示されている。石臼の規模が大きく堅く見えた。そして石臼を木の箱に入れるとパウダーが一カ所に出るようになっている。

シベリアの人たちが建てて生活した木の家の「ユルタ」も縦半分に割り中を見やすく陳列してあった。様々な生活道具が所狭しと展示されていた。ベッド、台所、食事をし、仕事をする空間が皆一ヶ所、「ユルタ」の中で成りたっている。空間は狭くて小さいが効率的に利用されたようだ。多分、こちらでたくさん生える木を利用し寒さを耐えるために考え出した家に想えた。

その他に民俗博物館の中には鉄で作られたいろいろな道具や装飾品、バイカル湖で生産されたさまざまな魚や貝、シベリアの生活に必要な生活道具などが多く展示されていた。博物館に展示されている物の中で現在では使われていない物も多い。しかし、過去この地に住んでいた人々の生活を理解し、彼らが作って営んで来た姿を見ることと理解するには博物館ほど良い所はないといえる。博物館は生きている歴史だといえよう。

6. ブリャト人の生活と生活の痕跡、ウランーウデ市国立ブリャト博物館

2011 年はロシア人がこのウランーウデ市に移入しはじめてから 350 周年になったという。市内こちらあちらに 350 周年を知らせる垂れ幕やブラカードが掛かっている。このブラカードを見ながらウランーウデ市国立ブリャト博物館に入った。ウランーウデ (Ulan-Ude) 市はロシアブリャト共和国の首都である。ウランーウデ市はウラジボストックからシベリア横断鉄道で 3650 キロメートル (3 泊 4 日)、モスクワからは 5609 キロメートル (4 泊 5 日) 離れた所にある。韓国からはバイカルの西側にあるイルクーツクまで直行便で行くか、ウラジボストックを経由しイルクーツクまで行き、次にシベリア横断鉄道を利用しウランーウデへ行くことが出来る。主に夜に利用する夜行寝台車でイルクーツクからウランーウデまで 8 時間 (456 キロメートル) ほどかかる。バイカル湖の南側を挟みアルファベットの U 字形のように走るが早朝時にはバイカル湖を見る事が出来る。車でも移動することができるが道が険しく利用する人が多くないと言う。

ウランーウデ市にはセレンゲ川 (全長 992 キロメートル) が流れている。モンゴル内陸部のハンガイ山脈を出発点としてモンゴル内陸を蛇行し、北に流れウランーウデを経て西向きに方向を変えバイカル湖へ流れ入る。ウランーウデ駅ではシベリア鉄道とモンゴルのウランバートル行列車に乗ることが出来る。ウランーウデから出発した列車はウランバートルを経て中国の北京、上海まで繋がる。ウランーウデからウランバートルまでは中間の入国審査まで含め 24 時間ほどかかる (実際走る時間は 7 時間くらい)。

ウランーウデは元来ブリャト人が多く居住した所で 350 年も前から多くのロシア人が流入し生活し始めた。遊牧生活をしていたモンゴル人はロシア人の影響で定着生活をするようになり、1917 年ソビエト時代にはブリャト人の遊牧生活が禁止された。現在、ブリャト人はロシア人と共生して

いるが、生活様式はほとんどロシア式に変わったが彼らが生活した昔の姿は国立ブリヤト博物館で見ることが出来る。

8月14日午後ブリヤト人の生活の痕跡をうかがうために国立ブリヤト博物館を訪ねた。国立ブリヤト博物館は3階建てになっているが1階はブリヤト人の装飾品、2階は考古学的遺物・出土品、3階はチベット仏教の伝統医療に関連する遺物が展示されている。一階の装飾品の多くは体に飾る物で主に銀で作られている。2階にはブリヤト人の生活を知る事が出来る考古学的遺物が展示されている。ブリヤト人のシャーマンの中でも鍛冶職人は最も高い等級に位置づけられ、鉄で物を作ることを重要視した。考古学的遺物も鉄で作られた物が一番引き立っていた。特に鉄で作られた動物模様の装飾品は彼らの文化がスキタイ文化と関連が深いという事実を語っていた。これらは装飾品だけではなく鉄でさまざまな農機具を作り生活し、鎧や刀、銅鏡なども作り使った。

博物館には韓国の蒸し器に似ている素焼土器、銅鏡、鉄製の動物の装飾品、鉄製の犁先、年代を推定することは困難だが、シベリアに住んでいた諸民族たちがずいぶん前から使っていた物品などが展示されている。遊牧民族にとって重要な用品に皮製品がある。家畜や野生の獣を狩猟しながら生活していた彼らは皮の鞣しと装飾品を作るのに使われる多くの技術を持っていた。そして彼らは衣服や鼓はもちろん皮でさまざまな用品や生活道具を作り使用した。

遊牧生活をしていたブリヤト人は諸処に磨崖絵を残した。磨崖画は文字を持っていなかった遙かの昔、人々の記録によって彼らの居住位置と移動情報を提供し、文化を伝える手段としても利用された。今も嘗て刻んだ磨崖画をあちこちで見ることができる。シベリアで出土された遺物の中で装飾品としては動物模様が中心だ。博物館には遙かの昔の遺物だけでなくブリヤト人の文化と伝統を基本にし、現代感覚で製作された金属工芸品も展示されていた。この作品はブリヤト出身作家が作った作品で、鉄で作られた鹿文様の装飾品である。

7. イルクーツクのロシア食物

シベリアのイルクーツク市内にあるヨーロッパ式レストランの「イブロパ」でバイカル湖の周囲で食されているバイカル湖畔料理を味わった。食物は食べる人の好みによって、地域で取れるさまざまな材料を基に作られる。その地に住む人がどのような料理を使って食し、またどのように食べるのかは生活環境が文化と絡み合いながら複合的な様相をおびる。

シベリアの中心部にあるイルクーツクは周辺の広地に放牧している様々な家畜やバイカル湖で大量に水揚げされる魚が有り食料が豊かな地である。イルクーツクで食べられるロシア料理、他所で食べられるロシア料理とは異なる事も無いでは無いがシベリアの豊かさとバイカル湖の深さを感じとる事が出来た。

8月12日イルクーツク市内バイカルスカヤ通りにあるヨーロッパ式レストラン「イブロパ」で食べたロシア料理を紹介しよう。

ロシア人は普通、朝に「カシャ」というお粥を主食にする。「カシャ」はお米をふやかし砂糖と牛乳を入れ炊いたものである。そして夕方には牛、豚、羊、鳥肉などを食べる。

主食はパンでデザートはケーキを食べる。

1)「カシャ」。ロシア人が主に朝食の時、「カシャ」を食べる。米をふやかし牛乳と砂糖を入れ炊いて作る。韓国のお米のお粥よりは水分が少なく匙で掬って食べる。

2) パン。ロシア人の主食はパンである。普通、食パンが安価で一般的だ。丸いパンに胡麻をつけて焼いたものは高級品である。小麦を砕いて作っているので少々色が濃い。

3) ザラダ。バイカル湖で採れた「オムル」という魚を生のまま薄く切り、たまねぎ、煮じゃがいも、ビート、マヨネーズ等を和えて作る。その時、野菜を食べるが野菜は「ピトロシカ」というハーブである。韓国の「コス」と似ている香りがする。ロシア人が好んで食べるハーブである。

4) 「ウハ」とはバイカル湖で採れた「オムル」という魚を煮て作ったスープである。このスープの上には「ウクロブ」と言う香辛料が浮かんでいるが中にはじゃがいも、にんじん、たまねぎ、大根などが入っている。

5) 「シック」焼き。バイカル湖で採れた「シック」という魚を焼いたものである。「シック」は「オムル」より少し大きい魚である。西洋松たけ、たまねぎ、にんじんなどを混ぜて炒めた後、魚の上に乗せアルミホイルに包んで焼く。魚の上に「ピトロシカ」と言うハーブが浮かんだりする。

6) チョコパン。「チョコパン」の中には黒ケシの種が入っている。「チョコパン」を食べた後にコーヒーや紅茶、ジュースなどを飲む事もある。

地域によって人々の趣向や材料にしたがって食べ物は変わる。バイカル湖が近く有り、野原が広く家畜の多いイルクーツクでは魚と肉の料理を常食にしている。魚と獣肉を料理する時にはそれらの臭いをどのように無くして食べるかが大事である。現地の人々は「ピトロシカ」や「ウクロブ」、胡椒などの香辛料を使って料理し食べることが特徴である。

8. 肉を食べながら生活した遊牧民族の食物、ブリャトの伝統的な食物

人びとは自分が営む生活方式や自然環境にしたがって固有の食品を食べる風習を持っている。韓国人は遙かの昔からご飯とキムチと韓国みそ汁を主に食べながら生活した。シベリアの草原に住んでいたブリャト人は何を食べながら生活を営んだのだろうか？殆ど遊牧の風習は消えたとはいえブリャトの人の伝統的な食事風習をうかがうことができた機会があった。

8月13日午後、ブリャト共和国ウランーウデ市の北方、新興住宅街の横に有るブリャト伝統食堂バタレウルゴ（英雄が住む所という意味のブリャト語）という所に行ってみた。食堂は伝統的遊牧民が生活した「ユルタ」を現代式に建て替えた所だった。この食堂ではいろいろな料理を注文することができるがブリャト人であるダリマ先生の紹介でブリャトの伝統食物のみを選んで味わう事にした。

1) 焼いた牛のレバー。牛のレバーに小麦粉の衣を着せて焼いており、そして、たまねぎを切って載せていた。淡泊で美味だった。

2) アルビン。冷凍した馬のレバーの料理である。馬を屠りすぐにレバーを馬の油で包んで冷凍した後、食べる時は薄く切って食べる。かまないで口の中に入れてただ直ぐにとりとする。何等の臭いも無く馬のレバーだと聞く前には何を食べたのかを知る事が出来ない。馬レバーの上にはたまねぎを丸く切って載せていた。

3) マトンスープ。マトンを水から入れて煮てスープを作り、麺を別に湯がきスープに入れるスープである。香草を入れてあるのでマトンの臭みはあまりしない。

4) 「シャニ」。小麦粉で作ったパンである。味が淡泊でちょっとパサパサした味だ。

5)「ホシュット」。小麦粉で作ったパンである。パンの中に豚肉を入れて作っている。

6)「ボフ」。てんぷらのお菓子である。味が淡泊でちょっとパサパサした味だ。

7)「ポーズ」。餃子である。餃子の餡として中には牛肉（70 パーセント）と豚肉（30 パーセント）の挽肉を入れて、胡椒、塩、たまねぎなどを少し入れて作られている。最近では餃子の中にキャベツやじゃがいもを入れて作ったりするという。餃子はやっぱり北の寒い地方で食べ始めたように思える。

8)「ハリシャ」。デザートである。団栗に似ている木の実を挽き、豆腐、牛乳などを混ぜて作られている。上に覆われた白色の「スメタナ」は牛乳を加工してマヨネーズのようにして作ったものだ。周りにある赤色のものはチェリージャムである。

ブリヤト人は元来、牛、羊、馬などを育てながら遊牧生活をしていた民族である。食べ物も肉が中心である。そして小麦粉で作った餃子やパン、そして自然から得た木の実で作った食品である。安くはないが淡泊で素敵な食べ物である。

9. シャーマニズムの本場を尋ねてーブリヤト・シャーマンとの対話

シャーマン（shaman）とは北極に近くの地域で呪いを意味するツングース語「サマン（shaman）」が語原だといわれている。シャーマンは韓国語で、巫堂・巫子と呼ばれる。シャーマンは地域にしたがって状態や意味が違ったりする。ブリヤト人はシャーマンを「ボウ」という。

8月13日午後、ロシア・シベリア南東ウラン・ウデ市にあるシャーマンたちが集团的に儀式を行い、また占いをする「テングリ」という所に行ってきた。「テングリ」の入口には木を円錐状に立て青い布で縛り、獣の頭をそのてっぺんに飾ったりした。

ウラン・ウデ市はブリヤト自治州の中心地でバイカル湖の東にあり、昔からブリヤト人が居住していた所である。ロシアは1917年ソビエト社会主義を普及させると同時に宗教活動を禁止させ多くのシャーマンを消滅させた。1990年、ゴルバチョフの「ペレストロイカ（改革）」政策以降社会主義が撤廃され、宗教活動が再開され始めた。シャーマンたちが集团的に儀式を行い、占いをする「テングリ」には比較的広い地に事務室を持つ部屋と待合室がある。人々は「テングリ」の待合室で待っている間、シャーマンがいる部屋へ行ってシャーマンと相談をする。そして、「テングリ」の中で事務室とちょっと離れた所に巫堂があって人々が巫を準備し、或いは巫を行っていた。

ブリヤト人は家族と親戚らが全員決まった時間にシャーマンの巫堂である「テングリ」を訪れ巫をする理由をシャーマンに告げ、巫の準備をする。巫を前後してブリヤト人は準備して来た肉を煮て、肉や果物を分けて食べたりする。ブリヤト人はシャーマンに対する信仰を持っている。ブリヤト人は親戚らが集まり、自分たちの健康と幸運を祈る意味で巫を準備する。

巫の準備は先に祭壇にお供えを乗せ、親戚らが食べ物に分けて食べ、また、シャーマンを呼んで儀式を行い、再び外に出て白樺の装飾品の前で儀式を行う。ブリヤト人はシャーマンがいる「テングリ」で巫を行い、再び翌日ラマ寺院へ行って仏式で福を祈願する。

「テングリ」では「ラダ」というシャーマンに会って彼女とシベリアのブリヤト・シャーマンに対する話を聞くことができた。ソ連時代に宗教が禁止されシャーマンも全て消えた後、改革・開放以後は信仰が許容されシャーマンも登場するようになった。したがって、現在見る事が出来るシ

シャーマンを純粹な意味で血統を受け継いだシャーマンだとは言い難い。だが、「テングリ」で会ったシャーマンたちは嘗てのシャーマンが行った儀式や伝統を記憶していた人でありシャーマンに対するかなりの知識を持っていた。そして、シベリア地域がシャーマンの本場だという点で一般民衆たちの間ではシャーマンはある程度の社会的、宗教的役割を遂行していると推測出来る。対談には西江大学校宋孝燮教授、光州教育大学崔元五教授、児童文学作家の林貞子先生、龍谷大学須藤護教授たちが参加した。そして、通訳はブリャト州立大学アジア学科チデノ・バダリマ教授にご苦労して頂いた。

「テングリ」で会ったブリャトのシャーマンであるラダ氏は青色服を着ていたがこの色は空を意味する色であり、また青色は永遠を象徴すると言われている。

〈シベリアシャーマンとの対談〉

女性シャーマンで名前はラダと言う。現在、物理の教師であるが特に障害者生徒の家を訪問して物理を教えている。今はシャーマン集団で運営する「テングリ」のシャーマン事務所に出勤しシャーマン関係の仕事をしている。勤務時間は物理を教え、勤務が終わった後の時間である午後や、週末を利用してシャーマンの仕事をしている。現在出ているシャーマン事務所に出る以前に既にシャーマン資格3段階まで合格したがこちらのシャーマン事務室に出てから再び3段階まで合格したという。

－「シャーマンであるラダさんはお子さんがいますか？」

「娘がブリャト国立大学日本語・中国語科を卒業しました」

－「シャーマンであるラダさんの年は何歳ですか？」

「四十八才です」

－「シャーマンの資格3段階まで合格したとおっしゃいましたがシャーマンの資格段階は何段階までありますか？」

「シャーマンには黒シャーマンと白シャーマンがありますがそれぞれ九段階まであります」、「黒シャーマンは太鼓を打ちながら儀式を行って主に否定的な役目を主にします」、「白シャーマンは人間の身と心の病氣を治療するシャーマンとして鐘を使いながら巫を行います」

－「シャーマンであるラダさんはどんな段階を経験しましたか？」

「私は黒シャーマン2段階、白シャーマン1段階まで合格しています」

－「白シャーマンと黒シャーマンを区分する境界は何ですか？」

「黒シャーマンは北東の方に神を迎えて儀式を取り行い、信じる神は13神でその神の中にはバイカル湖を取り囲む多くの川たちの神、自分たちの氏神を迎えて儀式を行います」、「白シャーマンは白爺さん神を奉って、人間の体と心の病氣や骨を治療するシャーマンとして南西の方に向かって巫を行います」

－「シャーマンであるラダさんは神をまつる特別な行事を行いますか？」

「8月4日バイカル湖の中にあるアルホン島へ行き、13神をまつる儀式を行いました」、「そして8月7日にはキングトングという所へ行行って牡牛の神をまつる儀式を執り行いました」

－「アルホン島はどんな島ですか？」

「バイカル湖の中央にある島で島の中あるアルホン島へ行きます」、「こちらにはすべての神を含め13神が降りる所でもあります」

－「シャーマンであるラダさんが牡牛を始め動物神をまつる理由は何ですか？」

「シャーマンは多くの動物たちを神聖に祭ります。レナ川の神の中には狐がいます」、「ブリャト民族は四種類に分けられます。エヒリト、ブラガット、ホリ、ホンゴドル等がそれです」、「ホリ、ホンゴドルはバイカル湖の南側で生活し、エヒリト、ブラガットはバイカルの北で生活しました」、「このなかでブラガットは牡牛、エヒリトは魚、ホリは鉄、ホンゴドルは狼を神聖に扱います」

〈成巫儀式〉

－「シャーマンであるラダさんはどのようにしてシャーマンになりましたか？」

「私は始めはシャーマンになる意志はありませんでした」、「何年間ずっと体を病んでいました。それであちこちの病院を探し回りながら治療を受け、薬を飲みました」、「そうしている内に或るシャーマンを訪ね問答している内にそのシャーマンから『あなたはシャーマンになる用意ができています』と告げられたのです」、「それで覚悟を決めシャーマンになりました」

〈シャーマンの生活〉

－「シャーマンであるラダさんは物理の教師をしながらシャーマンとしての仕事もなさるのですがそれら二つは科学と信仰がぶつからないのですか？」

「物理の教師は職業として行い、シャーマンの仕事は自分自身の意志により行う事ではなく見えないう上から神の指示により行いますのでぶつかる事は有りません」

－「シャーマンのラダさんの首にかけている白と黄色のネックレスの飾りは何を意味しますか？」

「シャーマンの一番目の段階である白色（銀で作ったネックレス飾りを示しながら）は鏡を意味します」、「これは悪い鬼などを鏡で照らして入って来ることができないようにするのです。銀で作った腕輪などがそういう役目をします」、「そして次の段階は黄色です」

〈シャーマンの種類〉

－「一人のシャーマンが黒シャーマンと白シャーマンの両方の役目を果たせますか？」

「人によって違います」、「黒シャーマンばかりする人がおり、白シャーマンばかりする人もいます」、「しかし、黒シャーマンばかりする人は主に男たちです。何故ならば鍛冶仕事は主に男たちだけである仕事だからです」、「シャーマンたちは自分の祖先がどんな先祖であるのかによって決まります」

-「シャーマンであるラダさんは黒シャーマンと白シャーマンの二つの役目を果たせますか？」
「私が黒シャーマンと白シャーマンの両方ができる理由は私の先祖の中に黒シャーマンと白シャーマンがいたからです」

-「シャーマンと先祖の関係はどういう関係なのでしょう？」
「先祖の中にシャーマンが必ずいなければシャーマンになることが出来ません」

〈シャーマンの階級〉

-「シャーマンであるラダさんはどんな神をまつていますか？」
「元来、神の世界は階級が厳格です」、「おおよそ、九十九段階に分かれています」、「私の先祖の中にシャーマンであった祖母の内、44 階級に上った人もおり、祖父の内では鍛冶シャーマンで 55 階級に上った人もいます」、「私は主にそのような先祖を氏神として奉っています」

-「シャーマンであるラダさんが奉っている鍛冶場神はどんな神ですか？」
「鍛冶場神は七星の神で七人の祖父を指します」

〈シャーマンになるための修行〉

-「シャーマンであるラダさんはシャマニズムに関する学習をした事がありますか？」
「私はブリヤト出身シャーマンとしてモンゴル・シャマニズムに関心があります」、「それで機会がある度にモンゴル・シャーマンたちのシャーマン儀式とこちらの「テングリ」で行っている儀式的比較も行います」

-「シャーマンであるラダさんはシャーマン儀式に関する学習をした事がありますか？」
「私はここのシャーマン集団の「テングリ」に入る前にシャーマンの3段階まで上った事があります」、「しかし、その時、こちらのシャーマン集団の指導者と出会う機会があり、彼は私に鍛冶シャーマンに会うのが良いと言ったのでこの集団に入るようになったのです。」、「その方は現在の私の師匠でもあります」

-「シャーマンであるラダさんは師匠に出会った後シャーマン儀式に対しどのような変化が起きましたか？」
「師匠に出会った後、師匠が行う儀式を通じて自分の先祖シャーマンに対する具体的な系譜を知る事が出来、また、私の氏神たちをどのようにして降臨を願う儀式を行わなければならないかもよく分かるようになりました」

〈シャーマンへの入門〉

-「シャーマンであるラダさんは初めてシャーマンになったきっかけを作ってくれたのは何ですか？」
「正直に申し上げますと、初めてシャーマンになった時は仕方なくシャーマンになったので全ての

ものをよく知ることが出来ませんでした」,「ただ、或る神が降臨したという感じ意外は何も感じる事が出来ませんでした」,「後に師匠を通じて神をお招きし儀式を行う方法や神と一緒にシャーマンの役目を果たす方法を学ぶようになりました」

〈シャーマンの儀式〉

－「シャーマンであるラダさんが儀式を行う時にはどのような物品を用いますか？」

「儀式によって違いがありますが当地で占いをしてもらうために来た客には牛乳、茶、酒、香草等を使います」,「そして一人で祈る時は数珠を使います」

－「シャーマンであるラダさんはシャーマンとしてトランス（感霊）を経験したことがありますか？」

「トランスは個々のシャーマンによって経験したり、経験できなかったりもします」,「私は元来トランスを体験しています。トランスは神が降ることを体験することを言います」,「私は、特にトランス状態に陥ると私自身の声が変わります。降りた神の声が出るようになります」

－「シャーマンであるラダさんはシャーマンとしてトランス体験の過程ではどのように行動しますか？」

「トランス状態で質問を受ければ問者に対する像が目を閉じた状態で目の前に現われるようになり、その像を見ながら質問に答えるようになります」

－「シャーマンとして体験することができるトランスにはどのような種類がありますか？」

「トランスには三つの種類があります」,「まず軽いトランス、そして声を聞くトランス、最後に深いトランス段階に至りますが、誰でも出来る事ではなく師匠や高度の修練を経験した人だけが出来ます」

〈シャーマンの装飾品〉

－「シャーマンが身に付けている青色はどのような意味を持ちますか？」

「多くのシャーマンが着たり付けたりする飾り青色は青そら色で永遠であることを意味します」,

－「シャーマン事務室の前にある三角形に立てられている木と布切れ飾りは何ですか？」

「神々が降りる所で『スルデ』と言います」,「事務所前に建ててある七の柱は神々が馬に乗って降り、馬を縛りつけるもので『セルゲ』と言います」,「そして『スルデ』に飾られた青色の布地は神々に捧げる第一番目の贈り物です」,「儀式が終え準備して来た布地をスルデに縛って神に差し上げるのです」,「動物の骨や鹿や牛たちの角は神々が来て履く履物を現わします」

－「九つの『セルゲ』がありますがこれは何を意味しますか？」

「九は象徴的な数字です」,「これはシャーマンの世界や宇宙を九段階で分けたり、九つの神々を現わしています」

〈シャーマンの神〉

－「シャーマンの世界には神の数はどれほどありますか？」

「シャーマンの世界には多くの神々がいます。大きく二つに分けたりします」, 「55の神は西の方におわし, 44の神は東のブリャトにおわす神で度々怒る神でもあります」, 「シャーマンの神の階級は99のシャーマンの行動にしたがって55の神になる場合もあり, 44の神になる場合もあります」, 「全てを詳しく説明する事は出来ません」

－「シャーマンは夢で見た内容をシャーマン儀式や占いの解釈に使ったりしますか？」

「夢を使う事もあります」, 「私も個人的にシャーマンになる前に多くの男たちと飛び回っている夢を見た事があります」, 「何の夢なのか変に思ってシャーマンの師匠に聞いた事が有ります」, 「師匠は, 飛び回る事は知識を得るという意味だと説明してくれました」, 「今顧みればその夢どおりに自分自身はシャーマンに対する知識をたくさん得たと思います」

〈シャーマンと熊〉

－「シャーマン儀式で熊を崇拝し, また使用しますか？」

「この地域のシャーマンは熊を使わないのでよく分かりません」

〈シャーマンと神〉

－「シャーマンであるラダさんは主にどのような神を奉りますか？」

「シャーマンの世界には種々の神がいます」, 「私は主に婆さん氏神を奉りますがその神は星座の中で魚座に留まって来られる神でもあります」

〈シャーマンの活動〉

－「今日, シャーマンたちが集まって仕事をしているここに建物が建てられ活動し始めてどの位になりますか？」

「今日, シャーマンたちが集まって仕事をしている場所を『テングリ』と言います」, 「ここで仕事をし始めてから5年位になりますがシャーマンたちが仕事を始めたのはずっと以前からです」

〈シャーマンの段階〉

－「シャーマンの段階は九段階に分けられるとおっしゃいましたが各段階の詳しい名称と役目を教えてくださいませんか？」

「シャーマンは等級が上がる度に杖, 大鼓等さまざまな装飾品を新しく受けるようになり新しい役目を担うようになります」

－「シャーマンの中で『ダルハン』はどのような段階ですか？」

「『ダルハン』は高い等級の神で鍛冶の神です」, 「鍛冶のシャーマンは元々部族ごとにいました。鍛冶のシャーマンは鉄を利用しお金を作る神で財産を与えてくれる神です」, 「人間の願いを聞き入れてくれる神でもあります」

〈英雄叙事詩のゲセル〉

－「こちらにチベットやモンゴル地域で広く受け継がれている英雄叙事詩『ゲセル』を諳んじて聞かせるシャーマンがいますか？」

「英雄叙事詩の『ゲセル』を諳んじて聞かせるシャーマンはいません。私の周りでも聞いた事がありません」

〈シャーマンの葬式への参加〉

－「シャーマンは葬式にも参画しますか？」

「シャーマンは葬式には参画しません」、「ただし、死人の魂がああの世に行くことができず遺族に危害をおよぼす場合にその魂は呼び既に染んでいるという事実を証明してやります」、「まず、灰を踏んでみよ、草を折ってみよと告げます」、「そして食べ物（酒、茶、牛乳、菓子、キャンディー、焼マトン、青い布地）をもてなし、死の神のエルルリカンに送ります」

〈シャーマンの満足度〉

－「シャーマンであるラダさんはシャーマンとしての生活に満足していますか？」

「シャーマンになった後は体の病も治り、朝ごとに神々に一日の事を報告しながら楽しく暮しています」、「シベリアは嘗てのソ連時代の社会主義国家だったので宗教に係わるすべての施設を破壊し多くのシャーマンを殺したと言う」、「それで、シャーマンたちは死を選ぶか逃亡し、シャーマンである事を隠すようになった」、「改革、開放の後、宗教の自由が許容されシャーマンたちが再び登場し始めた」、「新たに登場したシャーマンたちは宗教的な側面よりは、一部ではあるが経済的な収入を得るためにシャーマンを始めた人もいると言う」

シャーマンとの対談を通じてシャーマンの元来の姿よりは現在のロシアで起こっている信仰的側面のシャーマンを理解することができた。最近新しくシャーマンを始めた人々は大部分時代の流れを把握し、積極的に受け入れる人々だ。また、旧ソ連時代以前のシャーマンの巫や儀式を見た事がある人もいる。

〈シャーマンの象徴〉

シャーマンの儀式では卵を供え物に使用する。卵は神に差し上げる金卵として卵から雛が孵化するように鳥が飛んで来る事を象徴する。その他にシャーマンたちが儀式を行う所には空の九人の息子を象徴する絵がかかっていた。シャーマンたちが巫を行う際には白樺の枝にさまざまな色折り紙をかけて装飾する。シャーマンが飾りや装飾に使う青色と白色は神を象徴し、黄色と赤色はお金を象徴する。そして祭祀床にはさまざまなのお供えを供える。祭祀堂と呼ばれるシャーマンが儀式を行う部屋の壁にはボト、タルムルそして動物、太陽、月、天の九人の息子を象徴する装飾植物がかかっている。お供えは酒、牛乳、水、茶、菓子が中心で果物はあまりできない所なので果物はお供え物としては使われない。

10. ブリャトのシャーマンの巫と歌の現場、ウスチオルディンスク・ブリャトの民俗博物館

8月10日イルクーツク市を出発しバイカル湖にあるアルホン島に行く途中に有るウスチオルディンスク（Ust-Ordinski）ブリャト民俗博物館を訪ねた。さほど広くはないがブリャト人の生活と信仰、そして長い伝統がよく分かるようによく整理されていた。そして博物館の一方にはブリャトのシャーマンの巫堂を建て巫を見られるようにしていた。我々が出発の前にあらかじめ知らせていたので村人とシャーマンが出迎えていた。村の人々は我々を博物館に案内する前に巫堂に案内した。巫堂の前では「自分たちの伝統だ」と言いながら小さな焚き火を燃やし我々に一人ずつ、足を火の上で回しなさいと言った。女性たちには足ではなくて手を火の上で回しなさいと言った。これは巫を行う前に不浄を清める作法だと言った。筆者が幼い頃、父が葬儀の家から帰ってくれば門の前で稲藁に小さな火を起し、足を上げ火の上で回した事を見たことがある。韓半島で40数年前に見た儀礼が再びここで再現された感じだ。やはり火は不浄を洗って浄化する力がある。シベリアと韓半島がお互いに文化交流があったのか、ではなければ火の浄化能力を信じた人々の共通された考えから出た儀式なのかは証明できない。火で浄化儀式を行い巫堂に入ると今度は黒い灰を額に塗ってくれた。これも巫に参加する人にする儀式だと言う。そして巫堂に入ると我々一行を歓迎する歌を歌ってくれた。

巫堂に入ると巫を主管するシャーマンが我々一行の中で年長男女を選びシャーマンの服を着せて座らせ巫儀式を進めた。不浄を洗い、牛乳を準備して神を呼び、多くの神のための歌を歌い、参加した人々を慰める儀式だった。シャーマン儀式を主導した人々は元々シャーマンだったのではなく村の人々が観光客を対象にブリャトの伝統服に着替えて迎えるとの事だった。1917年ソビエト社会主義は当初から宗教は阿片だと宣言しシャーマンやラマ僧などを何万人も處刑し流配させるなどだいたい的な肅正を行った。1992年ゴルバチョフによって「ペレストロイカ」すなわち開放が始まり嘗ての宗教の姿が徐々に蘇り始めた。今回見る事が出来たシャーマンも幼い頃シャーマン儀式を見たことがある高校教師で、授業のない時にこちらでシャーマン儀式を副業にしているという。ブリャト人や現地人はシャーマンを師匠として持てなし尊敬するという。

巫堂で行っていたシャーマン儀式を見終えて博物館内に入った。博物館内にはブリャト人が生活して来た過程と生活の姿などが多くの遺物と共に陳列されていた。特別に目を引いたのは嘗て人々が描いたと推定される岩壁画である。元来、岩壁画は岩や洞窟などに大昔の人々が描いたので言わば岩絵だと言える。岩壁化は人類歴史上存在する最も古い絵で4万年前の旧石器時代から描かれたと推定される。恐らく、村の代表やシャーマンが描いたものとして知られている。この博物館では小さな石に刻まれた岩壁画をも収集し陳列されている。岩壁画に描かれた絵がよく見えない時や風解し薄くなって鑑賞しにくいと思ったのか白紙に模写して並列して陳列されていてよく鑑賞出来た。

次の目的地であるバイカルに向かおうとするとシャーマンはとても優しく私たちに祝福し見送ってくれた。バイカル湖は神聖な場所なので此处でシャーマンに不浄を祓って貰ってから出発するのが決まりなのだが「あなたたちは順序に従って行ったのでバイカルの神も喜ぶだろう」と語った。そのお陰なのか我々一行はバイカル湖での滞在を含め多くの日々を何らの事故もなく無事に帰って

来ることが出来た。

11. ブリャト人の二重的信仰形態が見られる所、イボルギンスキー・ダサン・チベット仏教寺院

8月14日午前、ウルランーウデ市の南側郊外隣接のイボルガ村外郭にあるイボルギンスキー・ダサン・チベット仏教寺院を訪ねた。ロシアには諸処に仏教寺院が多くあるがこの寺院が最大のチベット仏教寺院である。1945年に建てられたこのイボルギンスキー仏教寺院はロシア仏教の最高リーダーであるパンデト・ハンボラマが滞在していた所で常に仏教信者と旅行客で賑わっているロシア仏教の中心地でもある。寺院の広い敷地の内には仏像を奉っている諸建物があり、僧房、書庫、マニゴ（筒経典）などが隣立していた。寺院を見回すには門から入って太陽の方向、すなわち時計方向の左に曲がってお寺の全体を一回りすると寺院全体を見ることが出来るようになっていく。女性信徒は必ずスカートを穿きヒールの低い履物を履かなければ入れないように出来ているという。特に女性のヒールの高い靴が地表中に住む生命体に致命的だと考えられ禁じている。しかし、観光客には寛大なようだ。ペレストロイカ以後、1992年に著名なチベット仏教のリーダーのダライ・ラマがこの地を訪問している。

隣近地域に住む仏教信者やブリャト人は毎年正月二日に此処を訪問し、一年の願いを込め自分の干支に当たる色の布地に馬が描かれた飾り布を買って木に掛ける。そうすれば一年の間、事故もなしに無病息災で一年を過ごすことが出来ると言う。寺院の中の諸処には仏陀を奉っている寺が多く、見て回るのに半日以上かかった。仏様にお金や食べものや小麦、香燭、蠟燭などを捧げられた寺が多く、またお金を出して寺を建立する際に必要な煉瓦に記名出来る寺もあった。

イボルギンスキー・ダサン・チベット仏教寺院の敷地の中にある多くのマニゴがある。そして、お寺の建物には必ず一つずつマニゴが置かれている。人々はそこを通り過ぎながら時計方向に一回ずつ回る。寺の建物の横には必ずマニゴがあって通り過ぎ去りながら時計方向に回すようになっていた。マニゴは筒の中には仏教経典が入っており一回回す度に経典を皆読んだ効果を現わすと信じられており全ての信者は神聖視し誠心誠意回しているのを見ることが出来た。

印度で始まった仏教はガンダーラ地方を経て仏像が作られ、中国やチベットでは自分の言葉で仏典を翻訳した。それは如何に仏教に対する信仰が厚く強いかという事を物語っている。そのような経緯の中で韓半島にもかつて仏教が渡来し八万大藏經を刻み、護国仏教を唱えたが未だに固有韓国語に翻訳された仏典を持ってはいない。恐らく、中国を通して漢訳仏典が入って来た事と儒教を崇尚し仏教を抑圧したのが原因だと思われる。イボルギンスキー・ダサン・チベット仏教寺院の敷地の中で僧侶が信徒と話を交わしている姿も見られた。仏教寺院の敷地の中には10メートルほど離れた所で目を閉じ手の平を正面に伸ばし前に行き仏像に手が触れられるように出来る所もある。周りで方向を音で示してやればやっと触れることが出来る。諸階層の人々がこのゲームを行うがどうしてなのか煩惱の少ない子どもが容易く触れるのを見る事が出来る。

韓国の僧侶の僧服は灰色だが、日本の僧侶は黒色である。しかし、こちらのチベット僧侶たちは紫朱色の僧服を着る。ブリャト人たちは普段シャーマンに行って占いをして貰ったり、巫をして貰ったり、ラマ仏教寺院に来て福を願うなど二重の信仰意識を持っている。これはシャーマニズムの基台の上に仏教を受け入れた結果だと思われる。

イボルギンスキー・ダサン・チベット仏教寺院の敷地の中にあるお寺の中でこの地の出身で有名な僧侶が住職をしている塔頭もある。特に丹青模様が華麗で美しい。チベット仏教の丹青模様が韓国にも伝わり韓国の寺院にも丹青模様が始まったと言う。ロシアにいるチベット仏教寺院の丹青模様が韓国寺院の丹青模様がよく似ている。お寺のあっちこっちにシャーマンの「テンギ（少年少女のお下髪の先につけるリボン）」が結ばれている。この青色シャーマンの「テンギ」はそら色で永遠を象徴すると言う。この青色の布切れを通じてここに住む人々はシャーマニズムと仏教を共生させながら共存している。

12. リストビヤングカの日本人墓、シベリア抑留日本人の強制労働

8月15日、解放66周年になる日の午後シベリア・イルクーツクから70キロメートルほど離れているリストビヤングカでバイカルの湖が眺められる丘陵地にある共同墓地を訪れた。ここはシベリア抑留時代に死亡した日本人60名の慰霊碑がある所である。日本は1918年からシベリアに軍隊を派遣し始めた。多い時には軍人が7万人を超える時もあった。しかし戦死者が多く出で戦況が悪くなりついに1922年撤収を終えた。1945年戦争が終わって日本が降伏すると満洲の周辺を監視するという名目で進駐してきたソ連軍は当時満洲とサハリン等に駐屯していた日本軍人、軍人家族、朝鮮人まで50万（200万人という説もある）をシベリアに強制的に連行し強制労働をさせた。シベリアの極寒の自然環境と疾病、食不足などで6万名以上（45万人という説もある）の命が奪われた。日本はアメリカとソ連に対し日本軍を強制連行したことはポツダム宣言違反だと強く反撥し送還を要求した。1956年、日本とソ連間に国交正常化が樹立し抑留された人の中の日本人47万3千人が日本の地を踏むようになった。しかし、帰ることが出来ずシベリアで没した日本人の墓はシベリアの諸処に今も残っている。リストビヤングカのニコリスカヤ教会の側にある共同墓地の日本人慰霊碑には平和祈願文と死亡者の名前が刻まれている。

これらで察する限り此处と関わりがあるか或いは此处で生活したことがある日本人が此处をよく訪問しているように思われた。シベリアから帰国した日本人は国を相手に裁判を起こし補償を要求するが結局原告敗訴判決（2009.10、京都地方裁判所）が下り、日本政府が与える慰労金（25-150万円、2010年5月、日本国会参院議決、2010年6月衆院議決）で泣き寝入りしなくてはならなかった。シベリアの諸処を回って見ると日本人の墓が多く見られ、日本の観光案内パンフレットには行き方まで詳しく出ている。しかし彼らと一緒に連行された朝鮮人は何人に上るのか、何処でどのように死んだのか未だに明らかになってはいない。歴史は勝者、長者が中心だと言う。戦争は終わったが、ソ連に強制連行された朝鮮人の魂はまだシベリアの原野を彷徨っていると思われる。

1993年10月、ロシアのエリツィン大統領は日本を訪問し、日本人の強制抑留と労働が非人道的な行爲だったと認め謝罪の意を現わした。ソ連側は抑留時に死亡した人の名簿を引き渡した。このような様々な事情を鑑みればロシア側は朝鮮人に対する資料も持っているように思える。死人を生き返らす事も、歴史の時計を元に戻すことも出来る事ではない。しかし、歴史的事実を記憶し二度と再びそのような過ちと悲劇を繰り返さないようにすることは生きている人間の責務である。

13. シベリアの近代化

－1787年の韓半島と日本の姿、イルクーツク（Irkutsk）歴史博物館

8月15日午前、小雨降る日、イルクーツク歴史博物館を訪ねた。イルクーツク歴史博物館は市街地繁華街のカール・マルクス通り端の右側にある。二階建ての建物で一階は事務室と会議室があり、二階はショールームになっている。ショールームは大きく三つに分けられており、考古学的遺物・出土品、シベリア生活遺品そして近代の遺物などである。先に考古学遺物・出土室には先史諸遺跡が発掘状態の姿で復元されている。様々の出土遺物や人骨も整然と並べられ展示されていた。そしてシャーマニズムを紹介するためにシャーマンの部屋が復元されていた。

シベリアでの生活を介绍するショールームには最初にロシア人がシベリアに入植した時に持って来た地図が多く展示されていた。都合よく地図に描かれた韓半島と日本列島の姿も見られた。一時、日本が此处イルクーツクに進出したこともあつてか日本関連衣服も展示されていた。

ショールームに用意された人物や衣服は初期にシベリアに住んだことと考えられる狩人、シャーマン、日本人が行事時に着る上着、ロシア正教会の神父の姿等だった。

近代遺物のショールームではイルクーツクにロシアの影響がどのように拡大して行ったのかを台所の形やギリシア正教の多くの遺物を通じて見せていた。歴史博物館はあまり大きくないが立派にイルクーツクの変化と実状を余すことなく見せていた。博物館を巡回し出ようとすると幼稚園生たちが博物館を見学していた。子供たちがゴムチューブの砂の中に隠されている土焼きの割れ端を探していた。このように探した割れ端を再び合わせて素焼きの元形を復元する遊びをしていた。

14. まとめ

シベリアは極寒と長時間の冬期により、人を容易に近づけなかった。けれども、そこにも遙かの以前から人々は居住していた。彼らはそのような厳しい環境の中でも自分たちなりに適応した独自の生活様式を維持してきた。近代以降、ロシアの進出と諸部族との競争過程でシベリア居民もその急激な変化に対処せざるを得なかった。シベリア居民もまた急激に変化する環境の中で急変した部分とそうでない古の生活様式部分とが共存している。今回のシベリア踏査を通じ、シベリア居民の生活の中に残っている諸現象と諸事実を体験する事ができた。次回、このような機会が与えられれば、より具体的に、シベリア居民の生活の中に残存する変化した部分と変化せず温存されている部分とを比較検討し、より深く掘り下げる作業が行えると思う。

注

1) 札幌大学 木村英明, 2011. 8. 20.

<http://tonko.photo-web.cc/11gatukara/gureetojilyani/siberiaB/2/maritaiseki.html>

参考文献

윤명철, “시베리아 샤머니즘의 원류를 찾아서”, 『신동아』, 2001. 11.

地球の歩き方 (A3) 『시베리아, 시베리아철도와 사할린』, 주식회사ダイヤモンドビッド社, 2010. 12.

마빈 헤리스, 『음식문화의 수수께끼』, 한길사, 1992.

정연학, 『한중농기구 비교연구 - 파비에서 쟁기까지』, 민속원, 2003.

김열규, 『기호로 읽는 한국 문화』, 서강대학교출판부, 2008. 10.

줄리언 벨 저, 신혜연 역, 『세상을 비추는 거울 미술 (동서양을 넘나들며 고대부터 현대까지 인간을 매혹한 세계미술사)』, 예담, 2009. 10.

山下静夫 『시베리아 역류 1450 일』, 東京堂出版, 2007. 7.